

Pilgrimage and Rituals for Vithoba

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5156

ヴィトーバー神への巡礼と儀礼

島 岩・小 磯 千 尋

Pilgrimage and Rituals for Vithobā

Iwao SHIMA and Chihiro KOISO

ヒンドゥイズムにおけるバクティ運動の展開とマハーラーシュトラのヴィトーバー信仰

インドのヒンドゥイズムは、ヴェーダ文献に基づくアーリア的なブラフマニズムが非アーリア的な土着的要素を取り入れてゆくことによって、紀元前6世紀から紀元後6世紀頃にかけて形成され(ヒンドゥイズムの形成)、紀元後7世紀以降には仏教に代表される非ブラフマニズムの伝統を凌駕するような形で復興を遂げ(ヒンドゥイズムの確立)、その後も絶えず異質な新しい文化的要素を取り入れながら自らを変貌させてふくれあがってゆき、現代にいたっているのである。

このヒンドゥイズムの形成、確立にあたって大きな力となり、その後も中世ヒンドゥイズムの宗教的特質を形作っていった宗教運動の一つにバクティ運動(唯一の最高神に帰依することによりその神の恩寵によって救済されるとする宗教運動)がある。このバクティ運動は、紀元前1世紀頃の成立とされ現在でもインドで最も親しまれている聖典『バガバアッド・ギーター』にその起源をもち、7世紀中葉から9世紀中葉にかけて南インドに起こったアールワール等のタミルの宗教詩人たちの運動を背景として大きな盛り上がりを見せ、それがブラフマニズムの伝統のなかに取り入れられることによって全インド的に広がっていったのであるが、このバクティ運動のその後の展開には次のような三つの局面が認められるであろう。

すなわち、(1)タミルという非アーリア的な土壤のなかで形成されたバクティ運動がブラフマニズムの伝統のなかに取り入れられ、最高神への愛という本来情緒的性格の強いバクティが、ブラフマニズムの主知主義的・瞑想主義的な伝統との調和を図るような形で解釈されていった段階。この段階を代表する者にラーマーナ・ジヤ(1017—1137)やマドヴァ(1197—1276)があり、例えば前者は、バクティをウパニシャッド的な知(vedāna)や瞑想(upāsanā)と同義に解している。(2)その後ブラフマニズムのもつ主知主義的・瞑想主義的な伝統がバクティのなかに飲み込まれ、主知主義的・瞑想主義的な色彩が払拭されて、

バクティはその本来の情緒的性格を取り戻すのであるが、そののちのバクティ運動の展開には次の二つの局面が認められる。すなわち、(a)プラフマニズムの伝統を言語的に支えてきたサンスクリット語を通してバクティが広められてゆき、バクティはプラフマニズムの伝統のなかにも浸透していったという局面と、(b)10世紀以降に次々と成立してきた地方言語を通してバクティが広められてゆき、バクティは下層カーストの人々の間にも広く浸透していったという局面である。このうち前者を代表するものとして、ニムバールカ（14世紀）やヴァッラバ（1473—1531）のバクティ運動がある。一方、後者を代表するものとして、西インドにおいてマラーティー語を媒体として展開していったマハーラーシュトラのバクティ運動があり、そしてそれは、ここで取り上げるヴィトーバー（ヴィックタラ）信仰を軸として展開されていったのであった。

マハーラーシュトラにおけるヴィトーバー信仰の展開

ヴィトーバー信仰とは、ヴィトーバーあるいはヴィックタラと呼ばれる神を、ヴィシュヌあるいはクリシュナと同一視し、このヴィトーバーという唯一の神に帰依することによりその神の恩寵によって救済されるのだとする信仰であり、それは現在マハーラーシュトラを中心とするマラーティー語圏全域に広まっている。

このヴィトーバー信仰は元来カルナータカ地方にその起源があり、現在その本拠地となっているマハーラーシュトラのパンダルプールにその信仰がもたらされたのはプンダリーカという聖者によってであるとされているが、それがいつのことであるかは不明である。しかし、1189年の碑文には、その年にヴィトーバーの小さな祠がパンダルプールの現在ヴィトーバー寺院のある場所に始めて建てられたことが記載されているので、それよりあまり古いことではないと推定される。また、別の碑文によれば、その同じ場所にヴィトーバー寺院が建てられたのは、1273—77年のことだとされているので、このころには、このヴィトーバー信仰は、パンダルプールを中心に一定の広がりを見せていたものと思われる。

その後このヴィトーバー信仰をバクティ運動のなかで理論的に基礎づけ、さらに広汎な大衆の中に広めていったのが、次に述べる聖者たちの活躍だったのである。

(1) ジュニヤーネーシュワル（1271—93）

ジュニヤーネーシュワルは、遊行者となった（遊行期）のち家庭に戻った（家住期）父のもうけた子であったため、ヒンドゥー教徒の守るべき四つの生活期（学生期、家住期、森棲期、遊行期）の順序を乱した結果生まれた子という烙印を押され、所属カーストであるバラモンに入ることを許されず、不可触民の間で育てられたが、小さい頃からその宗教的天才ぶりを発揮して、水牛にヴェーダを唱えさせたり、死者を生き返らせたり等の奇蹟を行い、22才の若さで入定したと言われている。しかし、彼の名を不朽のものとしたのは、その著『ジュニヤーネーシュワリー』で、それは、各地でバクティ運動の基盤となった『バ

ガヴァッド・ギーター』にたいするマラーティー語の注釈で、この書はのちに、ヴィトーバー神を信仰する人々（ワールカリ一派）の聖書とも言うべき位置を占めるようになったのであった。そのなかで、彼は、『バガヴァッド・ギーター』に登場する最高神クリシュナをヴィトーバー神と同一であることを明確にすることにより、一方では、ヴィトーバー信仰を『バガヴァッド・ギーター』（紀元前1世紀頃成立）以来のバクティの流れの中に位置づけて理論的に基礎づけるとともに、他方では、ヴィトーバー信仰およびマハーラーシュトラにおけるバクティ運動がその後マラーティー語を媒介として展開し、民衆に広まってゆく拠所を築いたのであった。

(2) ナームデーヴ (1270—1350)

この夭逝した天才ジュニヤーネーシュワルの伝記を書き、広く世間に伝えたのが、ナームデーヴである。彼は、その出身がシュードラの仕立屋カーストであることもあり、学識はなかったが、そのかわり分かり易いマラーティー語でヴィトーバーへの讃歌(アバング)を歌い上げて、ヴィトーバー神にたいしてバクティを捧げれば出身カーストに関わりなくすべての人が平等に救われると説き、不可触民を含む広範な大衆のあいだにヴィトーバー信仰を広めていったのであった。また彼は、パンジャーブ地方への旅を通して、北インドのバクティ運動にも影響を及ぼし、その影響は、ラーマーナンダを経てカビールやナーナクにまで及んでいるのである（たとえば、彼の讃歌はシク教の聖典『グラント・サーヒブ』の中にも収められている）。

(3) エークナート (1533—99)

ところがその後、ムスリムの勢力が侵入してきたため、ヴィトーバー信仰およびマハーラーシュトラのバクティ運動は、マハーラーシュトラの社会のなかに深く根づくことができなかった。この停滞は長く続いたが、約200年を経たころ、カルナータカのヴィジャヤナガル王国の崩壊を契機として、デカン地方のムスリム諸王朝間に抗争が生じた際、ムスリム支配層はマハーラーシュトラの地主層たちに援助を求め、そのため、マハーラーシュトラの人々（マラータ）は再び社会的に上昇する機会を得、マラーティー語とマラーティー語に基づくマラータ文化を共有するマラータ人としての自覚を高めるようになった。このような時代状況を背景として、再びマラーティー語を登場させ、マラーティー語によるバクティ運動を展開したのが、エークナートである。彼は、バラモン出身の碩学であり、ヴィシュヌへのバクティ説く『バーガヴァタ・プラーナ』第11章に対するマラーティー語の註釈、『ルクミニー女神との対話』（マラーティー語）、その当時散逸していた『ジュニヤーネーシュワリー』の編纂と出版等を通じて、ヴィトーバー信仰およびマハーラーシュトラのバクティ運動を復活させたのであった。

(4) トゥカーラーム (1598—1649)

このように復活されたヴィトーバー信仰およびマハーラーシュトラのバクティ運動を、

シヴァージー王によるマラータ連合の形成および反ムガール戦争によってマハーラーシュトラの人々の間にマラータ人としての自覚がさらに高まりつつあったという時代状況を背景として、マラーティー語を通して広くマハーラーシュトラの大衆に広めていったのがトゥカーラームであった。彼は、シュードラのクンビー・カーストの出身であり、エークナートのような学識はなかったが、ナームデーヴと同じように、分かり易いマラーティー語でヴィトーバー神への讃歌(アバング)を歌い上げ、ヴィトーバー神にたいしてバクティを捧げれば出身カーストに関わりなくすべての人が平等に救われることを説き、さらに、旋律をつけて神の名を唱え讃歌を唱和するサンキールタンという方法を用いることにより、マハーラーシュトラの広範囲にわたってヴィトーバー信仰を広めていった。そしてここにおいて、ヴィトーバー信仰およびマハーラーシュトラのバクティ運動は、その頂点に達したのであった。

その後、イギリス植民地下さらにはインド独立以降の近代との出会いにより、ヴィトーバー信仰およびマハーラーシュトラのバクティ運動は、これ以上の盛り上がりを見せることなく徐々に衰退してゆくのではあるが、しかしながら現在でも、以下に述べるように、民衆の間で多くの人々に支持され信仰されているのである。

ワールカリ一派と巡礼地パンダルプール

このヴィトーバー神を信奉し、『ジュニヤーネーシュワリー』を聖典として崇め、ナームデーヴ、トゥカーラーム等の聖者たちのバクティを説くマラーティー語の讃歌アバングを唱えること等をその重要な宗教活動の一つとしている人々は、ワールカリ一派と呼ばれている。そしてそのほかこの派の特徴には、(1)ヴィトーバーという唯一の神に帰依しその恩寵によって救済されるとする点 (*Bhāgavata Pantha*)、(2)先に述べたシュニヤーネーシュワール等の聖者たちをはじめとする大小の聖者たちを中心に信仰集団が形成されている点 (*Santasaṃjanācī Māndī*)、(3)それらの聖者たちとともに少なくとも年に2回パンダルプールに巡礼する点 (*Vārkari*、「時を定めて巡礼する人」の意味)、(4)トゥラシー木で作った数珠を首にかけてそれを菜食主義者のしるしとしている点 (*Mālkari*) などがある。そして、このような諸特徴のうちで最も重要なものが、この派の名称の由来ともなっている年2回のパンダルプールのヴィトーバー寺院への巡礼なのである。この巡礼はそれぞれ、インドの太陰暦のアーシャーダ月(6—7月)の11夜の日と、カールッティカ月(10—11月)の11夜の日にパンダルプールに着くように、二、三百キロの道のりを半月以上もかかって行われる。というのは、この両日にはさまれた4カ月間(雨期にあたる時期)は、ヴィトーバー神と同一視されているヴィシュヌ神が眠りについている時期、すなわち、ちょうど日本の神無月のように、神不在の時期であるとされており、この両日にそれぞれ、ヴィシュヌ神が眠りに入りまた眠りから目覚めるとされているからである。そして、パンダルプー

ルに着いたのち、巡礼者たちは、11夜の日から15夜の日までそこに留まり、ヴィトーバー寺院を中心として、町のなかの様々な寺にお参りをして、帰途につくのである。そこでまず、この巡礼の様子について、それに参加した体験に基づきながら紹介することにしたい（なお、パンダルプールの町およびヴィトーバー寺院の構造については、[Shima 1988]と[島1992]を参照のこと）。

パンダルプールの御足詣で

1. 巡礼

1984年6月、2年越しで念願のパンダルプールの巡礼（より盛大に行われるアーシャーダ月のもの）に参加することができた。これは日本人で長年インドのアーシュラムに暮らし、ヴィトーバー神の信者となって巡礼にも何度か参加した知人の仲介があって初めて実現することができたのである。信者にとっては、巡礼といふいわばハレの場に得体の知れない外国人が参加することは、秩序を乱すことになりかねない。知人の仲介だけでなく、私自身2年近くにわたる菜食、禁酒の励行、聖典の学習を行ったことが、ワールカリー集団の巡礼に加入できた大きな理由であった。サントの遺した美しいアバングやバジャンに魅せられ、ジュニヤーネーシュワルが唱えるアムリタ・アヌバヴァ（甘露の体験）に憧れての巡礼参加であった。

ヒンドゥー太陰暦のジャイシュタ（5—6月）8夜の日から、アーシャーダ月の10夜の日まで行なわれるこの巡礼は、ジュニヤーネーシュワルの禪定した地であるアーランディー（プネー北東20km）を起点とするものの他、デフー（プネー北東22km）起点の「トゥカーラーム・パールキー」、サースワド（プネー南東28km）起点の「ニヴリッティナートソーパンデーヴ（ジュニヤーネーシュワルの兄、かつ師でもあった）・パールキー」など大小100近くのパールキーが各地からパンダルプールを目指す。筆者は、このうちアーランディーを起点とする「ジュニヤーネーシュワル・パールキー」の第3ディンディーと行動を共にした。

巡礼の始まりを告げるのは、ジュニヤーネーシュワル寺院に集まり祈りを捧げ、パドウカーと呼ばれるジュニヤーネーシュワルの足形をパールキー（神輿）にのせる儀礼である。このパールキーには、この他それぞれの聖者のものがあり、各パールキーごとに信徒の集まりであるディンディーと呼ばれるグループが形成される。このディンディーとは、18日間に及ぶ巡礼の間、巡礼者たちの行動単位となるものであるため特定のグル（師）を中心に、またはカースト別に形成される場合が多い。ジュニヤーネーシュワル・パールキーのように100以上のディンディーを従えるものもある。また、各ディンディーの構成人数は50～300名とさまざまである。

以下は筆者が行動を共にした「ジュニヤーネーシュワル・パールキー」に限定して話を

進めたい。アーランディーを出発するパールキーの、第1日めの宿泊地は都市プネーである。ジュニヤーネーシュワルゆかりの寺院にパールキーを置き、巡礼者たちは寺院の宿舎またはそれぞれの縁故を頼って分宿する。プネーには2泊するのだが、これは巡礼に参加したくてもできない信徒たちにパールキーを参拝（ダルシャン）する機会を与えるためである。宿泊地は1日に移動可能な距離に合わせてあらかじめ設定されているが、プネーから次の宿泊地サースワードに向かう行程が、この巡礼中で一番きつい山道となる。信徒たちは行程がきつくつらいほど、より高らかにバジャン（神への讃歌）やアバング（聖者の残した詩篇）などを朗唱する。各ディンディーには、アーランディーにあるワールカリーアクセス（ワールカリーサンプラダーライ）から、聖典を初めバジャンやキールタン（歌と説教）、及びその伴奏となるムリダンガム（両面太鼓）やタール（鐘）などの歌や奏法を身につけたワーリー（ワールカリーグル）が何名か配され、巡礼者たちをリードしたり、巡礼先の宿泊地で夜が更けるまで素晴らしいバジャンやキールタンを聞かせてくれる。ワーリーの中には、協会を離れ、自分個人でデフー、アーランディー、パンダルプールの三聖地を巡り歩き、途中の村々で人々にバジャンやキールタンを聞かせて喜捨を受けながら、ヴィトーバー神への献身を続ける人も多い。

また、ディンディーは主催者によって組織的に運営される。参加者の食事や宿泊、そして荷物を運ぶトラックに至るまで用意され、あらかじめ各地方の衛生局の許可を得た、給水車による消毒された水の供給が定期的に行われる。筆者が参加した第三ディンディーは、歴史も古く、トゥカーラームの直系の子孫である富裕な穀物商の一家によって運営されていた。食生活や慣習の相違から、基本的にディンディーはカースト別、またはマハラージと呼ばれるグル（師）を中心に組織される。第三ディンディーにはバラモンも大勢参加しているが、食事だけは専任のバラモンの料理人を雇い、皆とは別にとっていた。この辺がカーストの区別を否定しながらも習慣を拭い去ることができない信徒たちの限界と言わざるをえない。

参加費160ルピー（約1,600円）も決して安いとは言えない。しかし一旦払ってしまえば、俗事に一切煩わされることなく、歩くことのみ専心できる。もちろんディンディーに属さず、牛車に家財道具を積み込んで一家でやって来る者や、必要最低限の物をつた袋を頭に乗せ、喜捨を受けながらひとりでひたすら神の御名を唱え、歩を進める老人たちも多い。このような人々は、特に充足感に満ちた幸せそうな表情をしているように見え、巡礼の本来のあるべき姿に接する思いである。

巡礼の朝は早い。出発前に沐浴を済ませ、パールキーのダルシャンを行うのが朝の大切な勤めである。時には、近くの他の聖者のパールキーのダルシャンも行う。パールキーの出発は毎朝6時半と決められているが、すべてのディンディーが動き出すにはかなりの時間を要する。自分の帰属するディンディーの出発の遅れが著しい場合には、各個人ごとに

歩を進め、後に合流することもある。行列に加わる際には、必ず路面の土埃を額につけ尊敬の念を表す。彼らにとっては聖者のパドゥカーを乗せたパールキーが通る道もまた聖なるものと化すのである。巡礼の行列は整然と6列になっており、そのうち左側の一、二列に女性が並ぶ。すぐれた歌い手であるワーリーの近くにいたいと思うのはやはり人情であろう。決められた場所があるわけではなく、毎日歩いているうちに暗黙の了解事項として皆自分の場所を確保していく。

それぞれの宿泊地にはいくつものディンディーが同宿することになるので、小さな村である場合には文字通りパンク状態になる。ディンディーごとに決まった宿泊場所をもち、小学校の教室や、体育館を初め、個人の家とその軒先などの場合もある。また、野宿も珍しくない。巡礼に参加できない、あるいは参加しない人々でも、巡礼者に積極的に喜捨をする。自らの功德をつむために何百人単位の巡礼者に食事を施す信徒もいる。

毎回の食事はディンディー単位でとる。巡礼者の荷物を積んだトラックとともに食事係の人々が先行し、支度をして待っていてくれる。天気の良いときの昼食などはまさにピクニック気分で、みな地べたに並び、木の葉をつないで作った皿で食事のひとときを楽しむ。しかし雨が降るとディンディーの本部が置かれた建物や、雨が凌げる場所で交替に食事をとるほかない。巡礼の期間はすでに雨季に入っているので、時には雨の中を歩かねばならないこともある。

昼食後は、しばしの自由時間となり、各自昼寝などを過ごす。キールタンを聞いたり、巡礼者有志によって演じられるバルールとよばれる風刺劇などを見て楽しむ場合も多い。また、人の列の間や円陣の中をジュニヤーネーシュワルを象徴する白馬を走らせるランガナと呼ばれる見世物がパルキー単位での娯楽として度々行われる。Dr. Dereulyは、このランガンを分析してマラータの人々の馬への歴史的崇拝と、騎馬民族の伝統がみてとれるとしているが、単純に馬を走らせるだけのこのランガナが巡礼者的心をとらえる点は理解に苦しむ。しかし、こうした単純さゆえに、ワールカリーの運動が一般大衆の支持をかちえたことは間違いないであろう。

昼食後の行程は朝と違って、暑さや午前中の疲れが残っており苦痛を伴う。この際巡礼慣れした人々は、昼休みの娯楽を見ずにディンディーの列を離れマイペースでゆっくり先へ進んで、適当な所で本隊と合流する。時には他のディンディーの中に交じって別のアバングなどを聞き歩くことも可能である。毎日の歩く距離は一定しておらず、最高で30km強で、平均すると15km以内なので強行軍とはいえない。救急体制も整っており、いざという時のために医師も同行しているので年配者も安心して参加できる。そういう意味では管理され、組織だっており、巡礼というよりも巡礼ツアーミーと言えるかもしれない。

どのディンディーもその配列はほぼ一定している。リーダー格のマハラージ（ワールカリーの中のグル）は、必ずエクタール（一弦琴）を持って列の後ろにつき、アバングなど

のリード・ボーカルを務める。中央を占めるのはムリダンガムを首から下げた若手のワーリーとなる。ムリダンガムは重く、1人で叩き続けることは困難なので、交代で演奏する。また、参加者の男性のほとんどがタールと呼ばれる真鍮の鐘を首から下げ、歌いながら無心に打ち鳴らす。これらの単調なリズムは、神の名を繰り返し唱えながら歩を進める一助となる。ワーリーの人々が一節を唱えては、それを特に派に属さない一般の参加者が唱和する形がよく行われる。こうすることによって、歌を知らない場合でも唱和でき、連帯感を醸し出す大きな役割を担っている。ジュニヤーネーシュワルの言うアムリタ・アヌバヴァ（甘露の体験）を共有することも可能となるわけである。このように、巡礼の中で道中のアバングやバジャンの唱和が果たす役割は計り知れない。

宿泊地では、パールキーの置かれる広場に各ディンディーが集まって鐘や太鼓を打ち鳴らし、全員でアバングを歌う。同じフレーズを何度も繰り返すものが多く、徐々にそのスピードが増してゆくと、鐘を叩きながら、あるいは踊り続けながら恍惚状態になる者も多い。1日の無事を感謝し、誰もが神を身近に感じる時もある。パールキーの総本部からの合図で、全員でアールティー・プージャー（献火の儀）をして、翌日の打ち合わせの後解散する。最後には「ジュニヤーネーシュワル・マハラージ・キー・ジャイ！（聖者ジュニヤーネーシュワルに称えあれ）」と参加者全員で一声を上げて1日が終わる。

こうして三々五々各自の一夜の宿へと散って行くわけであるが、ゆっくりと1日の疲れを癒す人はむしろ少なく、ワーリーを中心に集まり、宿泊地の村の人々も交え、夜が更けるまでキールタンやバジャンが続けられる。集まった人々は、それぞれご聴聞のマハラージやブーアがおり、お互いに顔見知りの場合が多い。また、巡礼者たちがその村に滞在することは、娯楽や情報流入の少ない村の人々にとっては大きな楽しみともなっている。

2. タブー

大勢が行動を共にする巡礼では、浄・不浄観に基づくタブーが多くある。巡礼時に限らず、ヒンドゥーの人々の浄・不浄観には戸惑うことが多かった。特にここでは、巡礼時に垣間見たワーリーの人々の浄・不浄観について触れておく。

まずワールカリーの絶対必要条件が菜食であり、肉食、さらに飲酒、喫煙が不浄とみなされる。カーストの区別や、外国人にも寛大なワールカリーたちであるが、参加していたアメリカ人の研究者が菜食の誓いを立てながら卵を食べていたことが知れ、即刻追放されるというできごとがあった。長年この巡礼に参加している前述のアーシュラム在住の知人（日本人）が、彼女の師（インド人）の主義主張もあり、「見せかけの（ワールカリーであるならかけねばならない）数珠よりも心に数珠をかけるべきだ」と数珠を身につけずにずっと参加していたのだが、アメリカ人の「不祥事」以来、マハラージたちとの議論の末、数珠をかけることを義務づけられてしまった。

また、生理中の女性は不淨視され、ディンディーの列に入れてもらはず、1人離れて歩かなくてはならない。もちろんパールキーのダルシャンもできない。うっかり人に触ると相手を汚れさせてるので、食事も離れてとらされる。食事を配膳する人も手渡しはせず投げて渡す。生理3日目に髪を洗ってからディンディーの列に加わられるが、パールキーのダルシャンは翌日まで待たねばならない。

巡礼中は、毎朝ダルシャンの前に沐浴して、洗濯済みの服に着替えることも絶対に守られねばならない。また、食事に関するタブーも特に厳しいものである。地べたに座って食事をするのはインド人の習慣であるが、あぐらをかいて座るのが正しく、横座りはタブーである。キールタンなどを聞く時も横座りは厳禁である。左右の手の使い分けも定められており、たとえば、右手を使って食べるのは今日よく知られているが、塩などが回ってきたら不淨とされる左手で自分の皿にとって良い。食後は汚れた右手で葉をつないだ皿をたたみ左手でコップを持ってごみ捨て場に皿を捨てた後、コップの水で手を洗い口を漱ぐ。初めて参加すると、一挙手一投足を監視されているようで緊張してしまう。外国人であるだけに、筆者に対する警戒も強かったようであるが、食事の作法が正しくこなせるようになって初めて、回りの警戒心も解けて仲間として受け入れられたように思う。

淨・不淨を細かく規定するのはバラモンだけかと思っていたが、下位カースト出身が多いワールカリー集団も厳しく規定している。これは、現世での不遇を来世で取り戻すために、ヒンドゥー教徒としての徳を積んでいるという見方もできるかもしれない。

3. パンダルプールへ

あるときは雨の中を泥まみれになり、ときには炎天下の土埃の中を黙々と歩き続け、アーシャーダ月9日（つまりエーカーダシーの2日前）の夕方までに全パールキーはパンダルプールの手前ワークリーに集結する。この時ばかりはテントもはらず全員が野原に野営する。ワールカリー集団が過去に輩出した聖者がパドゥカーや肖像画に象徴化され一堂に会するさまは迫力がある。ワールカリーにとっても信者が揃う貴重な機会であり、実際に、パンダルプールに入る前にこうして共に祈る場をもつことによって、改めて信者としての自覚と意識を高めるのである。この場所では不思議なことに雨に降られることは少ないというが、降った場合でも一晩中濡れながらバジアンやキールタンを歌い続ける信者が多いという。巡礼中は神の御加護のおかげか、雨に濡れても風邪など病気にかかるないと信じられている。しかし雨が降ると野営地では睡眠がとれないで、一旦個々にパンダルプール入りをして宿泊し、翌日早くワークリーまで戻り、パールキーと共に正式に、パンダルプール入りを果たすことも認められている。

ワークリーで体制を立て直し、新しく組織されたパールキーから順にパンダルプールへ向かって行進して行く。ジュニヤーネーシュワル・パールキーは、最も古いパールキーな

ので最後になる。先頭のパールキーが早朝4時頃からパンダルプールを目指して出発し、午前中には到着するのに対し、ジュニヤーネーシュワル・パールキーのディンディーがパンダルプール入りするのは夜8時を回ってしまう。

パンダルプールは人口6万人程度の門前町で、およそ3分の2の人々が寺院と寺院に付属した売店などで生計を立てている。巡礼期間中はその5~6倍近い人々が一挙におしかることになるので、文字通り町は巡礼者で溢れかえる。パンダルプールに着くと、パールキーは浄めの儀式のためにその足で直接ビーマー川へと運ばれる。これはガンガーベータ(川の参詣)と呼ばれ、信者たちは河で旅の埃を落とすと共に世俗の垢を洗い流し、ヴィトーバー神とのダルシャンにそなえる。この後ディンディーの構成員が集まりパールキーがしばらくの間安置される寺院でアールティー・プージャを行う。これをもってパールキーを運ぶディンディーの一員としての責任から開放され、エーカーダシーの日にヴィトーバー神のダルシャンに行ったり、祖靈祭を行うなど各個人の儀式に専念する。中心となるヴィトーバー寺院には、ダルシャンに訪れる巡礼者たちの長い列ができ、寺院の右繞路だけでなく、文字通り町中に溢れかえる。全員がダルシャンを終えるには、2日かかると言われている。寺院の中は迷路のように複雑で、一目神像を拝もうとする人々の熱気で溢れている。各自供え物を手に神の御名を念佛のように唱え、たちこめる香のにおいに灯明のギー(精製バター)やお供えの花やココナッツのにおい、さらにそれに押し寄せる人々の体臭が加わり、めまいにも似た圧倒的なエネルギーがその場を支配する。信仰という、目には見えないひたむきな人間の感情を肌で感じる一瞬もある。こうして長い道程を経て、やっとつかの間の「黒きお方」のダルシャンの機会を得るのである。「黒きお方」、ヴィトーバー神は、両手を腰にあてがった直立不動の姿を見せる。その特徴的な姿に、土着信仰の名残りを見出すことができるであろう。プジャーリー(僧侶)に供え物を手渡し、神像に額づいた後、額にティカ(赤い粉)を施され、神のプラサード(お下がり)を戴くと機械的に神殿から吐き出される。一秒でも長く神のお姿を拝そうという信者と、追い立てるプジャーリーの間のやりとりがすさまじい。静かな祈りは各自が自分の心の中に持つ以外に方法はないと思えてくる。

巡礼者はダルシャンを終えると、パンダルプールに数多くある聖者のマトゥ(祠)や寺院を巡ったり、連日続けられるキールタンなどを聞いて過ごす。また、各個人ごとにさまざまな儀礼を行う。

この巡礼行はプールニマー(満月)の日が最後となり、パールキーが一部の信者によつて再びアーランディーに向かって引かれて行くと、巡礼者も三々五々翌年の再会を約してパンダルプールを後にする。帰路は各自交通機関を利用するのが常であるが、一部の人々は往路と同じく行程を徒步で帰途につくのである。

ヴィトーバー寺院での儀礼

この年に二回の巡礼の日（11—15日）には、ヴィトーバー神は先に紹介したように、巡礼者たちのダルシャンにこたえるために、寝室に戻って眠ることはないと言われる。そのため、これらの日のあとには、疲れた神をリフレッシュする儀式（prakṣālapūjā）がもたれる。また、この年に二回のエーカーダシー（11日）の日（アーシャーディー・エーカーダシーとカールッティキー・エーカーダシー）には、特別の供養が行われる。さらに、毎月のエカーダシー自体も神聖な日だとされ、特別の供養が催される。またそれ以外に、養父が幼児クリシュナをカムサ王からまもってのにちなんだ日（Gokulāṣṭami、シュラーヴァナ月（8—9月）の月の欠けてゆく8日目）には、神の前で歌や踊りが催される。また、このような年中行事以外に、毎日行われている供養もある。以下では、この日々の供養について簡単に紹介しておくことにしたい。

まず、寺院を運営し、供養を行っている僧侶についてだが、パンダルプールのヴィトーバー寺院を代々維持・管理しているのは、マハーラーシュトラ州のバラモンのサブ・カーストの一つであるデーシャスタ・バラモンのバドワーたちである。そしてさらに、このバドワー以外に、この寺院には、以下の七種の僧侶がおり、実際の儀礼の執行にたずさわっている。それらはすなわち、プジャーリー（儀礼の主な執行者）、ベナーリー（サンスクリット語の真言を唱える僧）、パリチャーラカ（プジャーリーを補佐する僧）、ハリダーサ（マラーティー語の讃歌を唱える僧）、ディングレー（神の前で鏡を捧げ持ちまた祭壇と神の寝室の間にカーペットを引く僧）、ディワター（松明を捧げ持つ僧）、ダーンゲー（鉢を捧げ持つ僧）という七種の僧たちである。

これらの僧侶たちが、日々の行っている儀礼には、神の目覚めの儀式（kākādārati）、五種の甘露による沐浴の儀式（pañcāmṛtāpujā）、正餐の儀式（madhyāhnapūjā）、夕食の儀式（aparāhnapūjā）、就寝の儀式（sējartī）の五種がある。そのうち、正餐の儀礼は、神の着替えを行い、食事を捧げるという簡単なもので、また夕食の儀礼も、神の足を洗い、花輪と装身具を取り替え、食事を捧げ、アールティー（神の顔のまえで灯火を回す儀式）を行なうという簡単なものであるので、ここでは、1998年の3月5—6日に、筆者の観察したそれ以外の三種の儀礼を紹介することにしたい。

（1—2）神の目覚めの儀式と五種の甘露による沐浴の儀式 [4：30 A. M.—6：00 A. M.]

ラッパが吹かれ、儀式の始まりが告げられる。そののちまず、バドワー神の前で神の目覚めを祈願し、前日のお供えを下げる。次に、ハリダーサ以外の僧たちが神の安置されている部屋へ入る。それから、プジャーリーがパリチャーラカの運んで来たミルクと水で神の足を洗い、前日の花輪をとり塗香を塗る。次に、プジャーリーはバドワーからパリチャーラカを経て手渡された灯火（kākāda）でアールティーを行う。そのときハリダーサは神の

讃歌(kakadārtī)を唱える。それから、プジャーリーが、バターと砂糖を神の口へ捧げる。次に、ギーと樟腦の灯明でアールティーを行う。そのときハリダーサは神の讃歌(yugē at hṛ̥hāvīsa、ナームデーヴ作の贊歌)を唱える。そしてさらに、別の讃歌(āratīanantācī、エークナート作の贊歌)も唱える。アールティーと讃歌が終わると、参拝者は神に花を捧げる。そのとき僧たちは聖水とおさがり(prasāda)と前日の花輪を参拝者に配るのである。

神の目覚めの儀式に引き続いて、五種の甘露による沐浴の儀式が行われる。まず、パリチャーラカが銀の容器で水を運び、プジャーリーが、その水で神の灌頂を行い、次に神の着物を脱がせる。それから順次ミルク、ヨーグルト、ギー、蜜、砂糖で神の沐浴を行う。最後に法螺貝に入った水で灌頂を行う。このときベーナーリーはヴェーダの神の讃歌(purusaśukta)を唱える。そのうち、お湯で神の体を洗い流し、塗香を塗る。(なお、この間、神が脱衣状態のときは神の安置されている部屋の入口にはカーテンが引かれ、参拝者には見えないようになっている)。次に、神の体を拭いて新しい着物をきせ、顔を白檀の粉と塗香で拭う。そして、神の頭にターバンを巻き、額に白檀の粉を塗り、首に花輪をかける。その後、ディングレーが、神様これでよろしいでしょうかとでもいうように、着替えと化粧の終わった神の前に鏡を捧げもつ。それから、プジャーリーが神の足を白檀の粉で拭い、線香とギーの灯明でアールティーを行う。そしてお菓子を捧げる。このうち参拝者たちは、神にまみえ神の御足に額すこと(darsana)が許されるのである。

(3) 就寝の儀式 [11:30-0:45]

バドワーが神の安置されている部屋からすこし離れた神の寝室の戸を開け、神の寝台の準備をし、寝台の近くに灯火、ミルク、痰壺を置き、また神の足を洗う水も運ぶ。次に、ディングレーが、神の部屋から寝室への道を掃き、床に水を撒き、白い粉で床に模様を描いて道を清め、それから牛とクリシュナの足跡のついたカーペットを広げる(この上を神が通られるのである)。ダーンゲーは鉢をもち、ディワナーは松明をもって、その道の両側に控える。そして、プジャーリーが神の足を洗っているとき、ベーナーリーはサンスクリット語の讃歌を唱える。それから、ベーナーリーがアールティーを、プジャーリーが神の着替え、新しい花輪、お菓子を供える。最後に、僧たちが去り、バドワーは、神の前でアールティーを行ったのち、神の安置されている部屋の前にある広間の入口の戸に鍵をかけて去ってゆくのである。

なお、これらの日々の儀礼のほかに、願い事があるときには、いつでも臨時に、参拝者の希望に応じて、大供養(mahāpuja、1001ルピーの喜捨が必要)から供物を捧げる小供養(mangala bhoga、21ルピーの喜捨が必要、なお、1は数のはじまりなのでインドでは縁起のいい数とされ、結婚式などにも一で終わる金額のお祝いをもってゆく習慣がある)まで様々な供養も行われている。

おわりに

以上、観察した事例に基づき、パンダルプールのヴィトーバー神への巡礼と儀礼の紹介を行った。今回はこの巡礼の特質や意義についての考察を行う余裕は残念ながらなかつたが、ヴィシュヌあるいはクリシュナ神（さらにはその地方版とも言うべきヴィトーバー神など）の眠りと目覚めをモティーフとする巡礼や儀礼は、たとえばヴァッラバ派の寺院でも神の眠りと目覚め（それから食事）を中心とする日々の儀礼が行われていることが伝えられているように、かなりの広がりをもって行われている事象であるように思われる。そこで今後は、こうしたモティーフの類似した諸事例との比較を通して、これらの巡礼や儀礼の意味を明らかにしていきたいと考えている。

追記 論文中「パンダルプールの御足詣で」の部分を小磯が、その他は島が担当した。

〔参考文献一覧〕

- Abbott, J. E. and Godbole, N. R., *Bhaktavijaya : Stories of Indian Saints*, New Delhi, 1982.
- Amṛtāmubhava*, ed. by V. H. Gokhale, Poona, 1967.
- Bavle, B. S., *Dīṇḍī Callī Pāṇḍarīpūr*, Solapur, 1982.
- Belsare, K. V., *Tukaram, Bombay*, 1985.
- Bahirat, B. P., *The Philosophy of Jñānadeva*, Bombay, 1961.
- Behere, N. K., *Background of Maratha Renaissance in the 17th Century : Historical Survey of the Social, Religion, and Political Movements of the Maratha*, 1946.
- Bhagawat, D., "The Viṭhobā of Pandhari" (tr. by G. D. Sontheimer), *South Asian Digest of Regional Writing* 3, 1974.
- Bhandarkar, R. G., 『ヒンドゥー教』(島岩、池田健太郎訳)、せりか書房、1984.
- Bharati, A., "Pilgrimage in the Indian Tradition", *History of Religion* 3, 1963.
- Bhardwaj, S. M., *Hindu Places of Pilgrimage in India : A Study in Cultural Geography*, California, 1983.
- Cokhāmelā, *Cokhāmelā Abhaṅg Gāthā*, Bombay, 1950.
- Cokhāmelā, *Shrisant Cokhamela Maharaj yanche charitra va abhang gatha* (ed. by S. B. Kadam), Bombay, 1969.
- Dandekar, R. N., *Vārakarī Panthacā Itihās*, Poona, 1927.
- Dandekar, S. V., *Dyanadeo*, Maharashtra Information Centre, New Delhi, 1969.
- Dandekar, R. N., *Some Aspects of the History of Hinduism*, Poona, 1967.
- Dandekar, R. N., *Insights into Hinduism*, Delhi, 1979.
- Dandekar, S. V., *Dnyandeo*, Bombay, 1985.
- Deleury, G. A., *The Cult of Viṭhobā*, Poona, 1960.
- Deming, W. S., *Rāmdās and Rāmdāsīs*, Calcutta, 1928.
- Deming, W. S., *Eknāth, a Marāthā Bhakta*, Bombay, 1931.
- Desai, P. B., "Bhakti Cult in Karnataka", *Bhakti Cult and Ancient Indian Geography* (ed. by D. C. Sirkar), 1970.

- Deshpande, P. Y., *Jnanadeva*. Markers of Indian Leterature Series, New Delhi, 1973.
- Deshpande, K., *Marathi Sahitya*, Maharashtra Information Centre, New Delhi, 1966.
- Dere, R. C., *Śrīvītthala Eka Mahāsamanvaya*, Poona, 1984.
- Eck, D. L. (ed.), *Devotion Devine*, Paris, 1991.
- Edwards, J. F., *Dhyānēśvar*, the Outcaste Brahman, the Poet-Saints of Maharashtra 12, Poona, 1941.
- Entwistle, A. W & Mallson, F. (eds.), *Studies in South Asian Devotional Leterature : Research Papers, 1988-1991*, Paris, 1994.
- Feldhaus, A., *The Religious System of the Mahānubhāvas* : The Mahānubhāva Sūtrapāṭha, New Delhi, 1983.
- Fraser, J. N. and Edwards, J. R., *The Life and Teaching of Tukaram*, Madras, 1941.
- Gonda, J., *Aspect of Early Vaiṣṇavism*, Delhi, 1968.
- Jñāneshwar, *Jñāneshvarī* : A Song-Sermon on the Bhagavadgītā (tr. by V. G. Pradhan and ed. by H. M. Lambert), Bombya, 1986.
- Jñāneshwar, *Surasa Jñāneshvarī* (tr. by M. R. Yārdī). Poona, 1991.
- Jñāneshwar, *Jñāneshvarī* (ed. and tr. by Mamgarukar, A.), 3 vols, Bombay, 1994.
- Joshi, K. A. (ed.), *Śrīsakalasantagāthā* (a collection of all the saints' work), Poona, 1985.
- Joshi, P. M., *Bharatiya Samskr̥tkośa*, Poona, 1982.
- Karandikar, M. A., *Namdev*, Maharashtra Information Centre, New Delhi, 1970.
- Karandikar, V. R. and Lederle, M. R., "Philosophy in Marathi", *Philosophy in the Fifteen Mordern Indian Languages* (ed. by V. M. Bedekar), Poona, 1979.
- Karve, I., "On the Road : A Maharashtrian Pilgrimage" (tr. by D. D. Karve), *Journal of Asian Studies* 22, 1966.
- Karandikar, M. A., Namdeo, Bombay, 1985.
- Kolatkar, A., "Translations from Tukaram and other Saint-Poets (Namdeo, Janabai, Muktabai)", *Journal of South Asian Literature* 17 : 1, 1982.
- Kulkarni, S., *Eknath*, Maharashtra Information Centre, New Delhi, 1966.
- Kulkarni, S., *Eknath*, Bombay, 1985.
- Lederle, M. R., *Philosophical Trends in Modern Maharashtra*, Bombay, 1976.
- Lele, J. (ed.), *Tradition and Modernity in Bhakti Movement*, Leiden, 1981.
- Lokhande, A, Tukārām : His Person and Religion, Bern & Frankfurt, 1976.
- Machwe, P. B., *Namdev : Life and Philosophy*, Patiala, 1968.
- Macniclo, N., *Psalms of Maratha Saints* : one hundred and eight hymns translated from the Marathi, Calcutta, 1919.
- Macnicol, N. (ed.), Śrī Jñānēśvara Darsana, vol. 1-2, 1934.
- McGregor, R. S. (ed.), *Devotional Literature in South Asia : Current Research, 1985-1988*, Cambridge, 1992.
- Mahipati, *Bhaktavijaya : Tales of the Saints of Pandharpur*, Bombay, 1919.
- Mahipati, *Nectar from Indian Saints* (tr. from the *Bhaktalilāmṛta* by J. E. Abbott), the Poet-Saints of Maharashtra 11, Poona, 1935.
- Mahipati, *Santavijaya : Ramdas* (tr. by J. E. Abbott), the Poet-Sants of Maharashtra, 8, Poona, 1962.
- Mahipati, *Eknath* (tr. from the *Bhaktalilāmṛta* by J. E. Abbott), the Poet-Saints of Maharashtra 2, New Delhi, 1981.
- Mahipati, *Stories of Indian Saints* (tr. from *Bhaktavijaya*, vols. 1 & 2 by J. E. Abbott), the Poet-Saints

- of Maharashtra 9 & 10, New Delhi, 1982.
- Mahipati, *Tukaram* (tr. from *Bhākta līlāmṛta* by J. E. Abbott), the Poet-Saints of Maharashtra 7, New Delhi, 1986.
- Mate, M. S., *Temples and Legends of Maharashtra*, Bombay, 1962.
- Milton Israel & Wagle, N.K., *Religion and Society in Maharashtra*, South Asian Studies Papers 1, Toront, 1987.
- Mitchell, J. M., "Pandharpur", *Indian Antiquary* 11, 1882.
- Mokashi, D. B., *Palkhi* (tr. by Philip Engblom), Albany, 1987.
- Morinis, E. A., *Pilgrimage in the Hindu Tradition*, Delhi, 1984.
- Nemade, B., *Tukaram*, New Delhi, 1980.
- Neurgavkar, S. K., *Pālkhi Sohalā*, Poona, 1965.
- Nirbhai S., *Bhagata Nāmadeva in the Guru Grantha*, Patiala, 1981.
- Pandharpur, *Gazetteer of the Bombay Presidency : Sholapur*, Vol. 20 (ed. by J. M. Campbell), Bombay, 1884.
- Pandharpur, *Maharashtra State Gazetteer : Sholapur*, Vol. 23, Bombay, 1977.
- Prabhudesai, P. K., *Devikosa*, Poona. 1967.
- Raghavan, V., *The Great Integrators : The Saint Singers of India*, Delhi, 1966.
- Ranade, M. G., *Rise of the Marath Power and Other Essays*, Bombay, 1960.
- Ranade, R. D., *Pathway to God in Marathi Leterature*, Bombay, 1961.
- Ranade, R. D., *Mysticism in Mahārāshtra*, Delhi, 1982.
- Reenberg, S. E., "The Legend of Pundarika : The Founder of Pandharpur", *The History of Sacred Places in India as Reflected in Traditional Leterature*, Leiden, 1990.
- 坂田貞二他「地上の天界を歩く人々」『アジア・アフリカ言語文化研究』37, 1989.
- Sardar, G. B., *The Saint-Poets of Maharashtra : Their Impact on Society* (tr. by K. A. Mehta). Bombay, 1969.
- Salakasantaghātā*, ed. by Sakhare, Poona, 1961.
- Sheorey, I., *Folk Tales of Maharashtra*, New Delhi, 1982.
- Shyhaw, Hugh van, "Eknāthī Bhārude as a Performance Genre", South Asian Digest of Regional Writting 10, 1981.
- Shima, I., "The Viṭhobā Faith in Mahārāshtra : Vīthobā Temple at Pandharpur, Its Mythological Structure", *Japanese Journal of Religious Studies*, vol. 15, nos. 2-3, 南山大学宗教文化研究所, 1988.
- 島 岩, 「聖性の位階」『季刊民族学』64, 1992.
- Sontheimer, G. D. (ed.), *South Asian Digest of Regional Writing* 3, 1974.
- Sontheimer, G. D., *Birobā, Mhaskobā und Khanḍobā, Ursprung, Geschichte und Umwelt von pastoralen Gottheiten in Mahārāṣṭra*, Wiesbaden, 1976.
- Sontheimer, G. D., "Ursprung und Entwicklung der bhakti-bewegung in Maharashtra", *Indo-Asia*, 1981.
- Sontheimer, G. D., *Pastral Deities in Western India* (tr. by A. Feldhaus). New York, 1989.
- Stotramālā, *A Garland of Hindu Prayers : From Dnyaneshvar to Mahipati* (tr. by J. E. Abbott), the Poet-Saints of maharashtra Series 6, Poona, 1929.
- Thiel-Horstman, M.(ed.), *Bhakti in Current Research, 1979-1982*, Berlin, 1983.
- Tukāram, *The Poems of Tukarama* (tr. by J. N. Fraser and K. B. Marathe). 3 vols., Madras, 1909 -1915.

- Tukārām, *Selections from Tukaram* (tr. W. S. Deming), Madras, 1932.
- Tukārām, *An Indian Peasont Mystic* (tr. by J. S. Hoyland), London, 1932.
- Tukārām, *Village Songs of Western India* (tr. from *Tukārām* by J. S. Allenson), London, 1934.
- Tukaram, "Psaumes du pelerin" (tr. by G. a. Deleury), *Connaissance de l'orient : collection UNESCO d'oeuvres representatives*, Paris, 1956.
- Tukārām, "Tukaram" (tr. by A. Kolatkar), *Poetry India* 1 : 1, 1966.
- Tukārām, "Tukaram : Twenty-five Poems" (tr. by P. Machwe), *Mabfil* V : 1-2, 1966.
- Tulpule, G. V., *Abhaṅgavāṇīlā Pantharāja, Poona*, 1970.
- Tulpule, S. G., "Spiritual Autobiography in Marathi : a Tradition Lost and Renewed", *South Asian Digest of Regional Writting* 5, 1976.
- Tulpule, G. V., "The Origine of Viṭṭhala, A New Interpretation", *ABORI (Diamond Jubilee)*, Poona, 1977-78.
- Tulpule, S. G., *Classical Marā ṭhī Literature*, A History of Indian Literature, vol. IX, fasc. 4, Wiesbaden, 1979.
- Tulpule, G. V., *Pañca Santakavi*, Poona, 1984.
- Tulpule, S. G., *Mysticism in Medieval India*, Wiesbaden, 1984.
- Vaudeville, C., "Cult of the divine Name in the Haripāṭha of Dñānadev", *WZJSO* XII-XIII, 1968-69.
- Vaudeville, Ch., "Panḍharpur, the City of Saints", *Structural Approaches in South Asian Studies* (ed. by H. M. Buck and G. E. Yocom), Penn., 1973.
- Vaudeville, C., "Cokhamela, an Untouchable Saint of Maharashtra", *South Asian Digest of Regional Writing* 6, 1977.
- Vaudeville, C., "The Sant Tradition in Medieval and Modern India", *The Sant Tradition in India*, Berkely, 1980.
- Zelliot, E., "The Leadership of Babasaheb Ambedkar", *Leadership in South Asia* (ed. by B. N. Pandey), New Delhi, 1977.
- Zelliot, E., "Cokhāmelā and Eknāth: Two Bhakti Modes of Legitimacy for Modern Change", *Journal of Asian and African Studies*, vol. 15, nos. 1-2, 1980.
- Zelliot, E., "The Medieval Bhakti Movement in History", *Hinduism : New Essays in the History of Religions* (ed. by B. L. Smith), Leiden, 1976.
- Zelliot, E., "A Medieval Encounter between Hindu and Muslim : Eknāth's Drama-Poem, 'Hindi -Turk Samvād'", *Images of Man* (ed. by F. W. Clothey), Madras, 1982.
- Zwelliot, E. & Feldhaus, A., "Marathi Religiouns", *Encyclopedia of Religion* (General Editor : Mircea Eliade), New York, 1986.
- Zelliott, E., "Eknāth's Bharuds: The Sant as Link Between Cultures", *The Sants : Studies in a Devotional Tradition of India* (ed. by K. Schomer and W H. McLeod), Delhi, 1987.
- Zelliot, E. & Berntsen, M., *The Experience of Hinduism : Essays on Religion in Maharashtra*, New York, 1988.
- Zelliot, E., *From Untouchable to Dalit : Essays on Ambedkar Movement*, New Delhi, 1992.